



定番の人気商品「白木舟当り」、手前から時計回りに「芋の平」「小判(大)」「つくし」「こり」「丸入れ子」。

製作過程の一つ「厚紙(かぼと)し」。制作は1日に30~40個以上になることも



女性伝統工芸士

仲澤 恵梨さん

大館市生まれ、大館市育ち。36歳。短大卒業後、(有)東田産信商店に入社。曲げわっぱ作りに関わり、17年目。平成28年に伝統工芸士に認定

た。何回もアタックして、何とか会ってもらえたと思ったり、今度は「うちじゃなくてもいいでしょって言われて(笑)」。改めて他社も見学した仲澤さん。「ほかを見えますます、栗田産信商店がいい」と確信を持ちました。仲澤さんの熱意はついに聞き、晴れて曲げわっぱ職人としての人生がスタートした。

これまでの道は平坦ではなかった。「器用な方ではないから、最初から上手にはできないんです。それをどこか「初めてなんだからできなくて当たり前」って自分の中で甘えていて。ただどすかさず社長には「何でできないんだ」って、怒られるんですよ(笑)」。思い通りにいかない日々、悔し涙を流したことも少なくない。「必ず作れるようになって諦めてやるって思っていました」。

一人前になるには5年以上かかる世界。ちやうど入社から5年くらいがたったころ、「当時の社長が何かの取材で、私のことを「居てくれて助

かっている」って言ってくれて。普段はそんなこと言わないのでびっくりして、すごうれしかったんです。やっつけて良かったな、って思いました」。熱意と努力が報われ、職人として生きていく、そんな覚悟ができた瞬間だった。

数少ない女性職人として、壁を感じたことは一度もない。「会社も女性を区別するような雰囲気は全くないですし、ずっと居心地がいいです。それに、女性だからこそできることでもあります。私自身も毎日曲げわっぱ弁当を作っているけれど、弁当の中身を作って詰めて、食べて洗って、っていう一連の流れをするからこそ、気付くことと伝えられることがあるんですよ。弁当箱を洗って次の日まで完全に乾かすのは難しいから、1日おきに使うとね、とか。こんなおかしな言い移りしちゃうよ、とか。接客する機会も少ないがイベントなどに参加した際や友人、知人に勧められた際は、作り手、使い手として曲げわっぱの魅力を感じて伝えていく。

業界に入り、今年で17年目。仲澤さんにも先輩ができた。「私自身、見て覚えるって育ってきたから、後輩たちには基本的な部分だけはおしりかき教えてあげたい。それを自分なりに進化させて、私が教えたことを覚えていってほしいですね。後輩たちはみんなかわいい、そうお世辞のいい笑顔で話してくれた仲澤さん。お茶で爽やかそれは曲げわっぱから伝わるものとも少し似ているような、心地よい魅力であふれていた。

丸みと柔らかさに
心奪われ17年
作るのも使うのも
全て好き。



Eri Nakazawa

秋田県大館市に古くから伝わる「大館曲げわっぱ」。その丸く美しいフォルムと天竺杉の爽やかな香りは、多くの人を魅了する。そんな伝統的工芸品「曲げわっぱ」を継承する、女性伝統工芸士がいる。「おはようございます」と飾らない笑顔で迎えてくれたのは、仲澤恵梨さん。今年で17年目になる曲げわっぱ職人だ。

大館市生まれ、大館市育ち。物心ついた時から曲げわっぱが身近にあった。「当たり前だった曲げわっぱと初めてちゃんと向き合ったのは、中学生の時。大館工芸社が移転する時のセールで見つけた小さい曲げわっぱに「目惚れして、貯めていたお小遣いで買ったんです」。今でも小物入れとして大切に使っているという曲げわっぱ。仲澤さんの職人人生の原点ともいえる出会いだった。

ものづくりの道に進みたいと、本気でかじを取り始めたのは、短大の頃。進学した学部で住宅設計などを学んでいたが、その時知った在来工法に引かれた。木を削って組み立てる。その工法に魅力を感じ、「自分も何か木を使ってみよう、自分がしたい」と思うようになったという。「大館で木、ものづくりといったら、曲げわっぱがあるじゃないか、と」。

数ある曲げわっぱ制作会社の中でも栗田産信商店を選んだのは、触った感じが好きだったから。丸みを帯びていて柔らかいところが好き。だから、当時、社員の募集はしつこく、「どうしても入りたい」という思いは消せなかつた。